

## 【6】御流神道伝授聞書 附灌頂見聞記

写本1冊

〔書名よみ〕ごりゅうしんとうでんじゅききがき

つげたりかんじょうけんもんき

〔著編者〕妙海 〔写刊年次〕安政五年（一八五八）

〔外題〕御流神道伝授聞書 附汀見聞記

〔内題〕ナシ

〔その他題〕ナシ

〔残欠状況〕全 〔保存状況〕良好 〔装訂〕袋綴装（紙縫綴）

〔丁数〕三〇丁（後八丁は白紙） 〔本文用字〕漢字・片仮名 〔二面

行数〕不定 〔表紙〕本文共紙 〔法量〕縦八・〇糎×横一七・三糎

〔料紙〕楮紙 〔界線〕ナシ 〔書入〕ナシ 〔印記〕ナシ 〔備

考〕諸師2函29。表紙は縦長の向きで表記。

〔表紙〕

安政五年

御流神道伝授聞書

附汀見聞記

二月朔日始 妙海

〔書出〕（第一丁才）

△午年二月朔日神道

御印可ヲ授 ……（中略）…

△阿闍梨六ハラ契理大和上

△第一席 同二日

〔本文中〕（第四丁才）

▲神祇灌頂見聞記

△安政五年二月廿八日

ヨリ三月二日迄勸学院

ニ於テ六ハラハ寺契理カイ

和上灌頂相授一日二十人位 ……（後略）…

〔解題〕

本書『御流神道伝授聞書 附汀見聞記』は、御流神道玉水流の本拠であった京都・西福寺の住職（一八六四―六七）も務めた、津軽弘前の最勝院第三十三世・妙海（一八三一―一九〇七）による神道灌頂に関する聞書である。覚書風にしたためられており判読しづらい箇所も散見するが、御流神道玉水流における神道伝授の様相を直截に伝える資料として興味深い。

随所の年記を拮拾すると、安政五年（一八五八）に御流神道玉水流の継承者である六波羅蜜寺の契理より勸学院において伝授されたこと、その執行期間は二月一日より三月二日に及ぶこと、一日につき十人程度の灌頂相伝される規模であったこと、また同月二十八日には「神祇灌頂見聞記」が附されたことが知られる。さらに、附録の「神祇灌頂見聞記」には詳細な神祇灌頂壇図なども書き留められていることから、幕末期における神祇灌頂の具体相を復原する上でも有意義な資料である。詳細な解説と併せて、後考を期したい。

〔参考〕

・特設展示「南山城井出町西福寺神道灌頂資料」（国文学研究資料館、二〇一四年）

- ・シンポジウム「南山城と神道灌頂―井出町西福寺所蔵資料をめぐる」〔『仏教文学』第四一号、二〇一六年四月〕所収、中山一磨「西福寺の歴史」／向村九音「西福寺と椿井文書」／伊藤聡「西福寺の神道灌頂」／鈴木英之「神道灌頂道場図の復元」
- ・HP「橘氏ゆかりの御寺 遍照山西福寺」 <http://henjozan.xsrv.jp/>  
「神仏習合…玉水流についで」  
<http://henjozan.xsrv.jp/category5/entry10.html>  
「神仏習合…玉水流法脈」  
<http://henjozan.xsrv.jp/category5/entry11.html>
- ・『最勝院史 図版編』壹・貳（最勝院史編纂委員会、二〇一〇年）
- ・『寺院文献資料学の新展開』第一〇巻『神道資料の調査と研究Ⅰ 玉水流特集』（伊藤聡・編、臨川書店、近刊）

（原 克昭）

△年々二月初の祀  
所々可々授社三言  
△一書授口授社三言  
△二書授口授社三言  
△三書授口授社三言  
△四書授口授社三言  
△五書授口授社三言  
△六書授口授社三言  
△七書授口授社三言  
△八書授口授社三言  
△九書授口授社三言  
△十書授口授社三言

安受五年年  
御流神道傳授開書  
附汗見關記  
二月朔日始 妙海

△一書授口授社三言  
△二書授口授社三言  
△三書授口授社三言  
△四書授口授社三言  
△五書授口授社三言  
△六書授口授社三言  
△七書授口授社三言  
△八書授口授社三言  
△九書授口授社三言  
△十書授口授社三言

△一書授口授社三言  
△二書授口授社三言  
△三書授口授社三言  
△四書授口授社三言  
△五書授口授社三言  
△六書授口授社三言  
△七書授口授社三言  
△八書授口授社三言  
△九書授口授社三言  
△十書授口授社三言



